

ONE LOVE 通信 67号

2019年12月14日発行

ここ3年くらい、この時期に日本に戻っていたけど、今回は帰国時期をずらした。冬は寒いので、動きが鈍い。いろんなものを着なくてはいけないから、面倒だ。そしてもう一つ。4月に参加したいイベントがあり、それに時期を合わせた。ということで、次の帰国は年明け、3～5月の3か月を予定しています。いつものように活動の話をしながら、皆さまのご協力を集めたいと思います。今回は前号で紹介した「義足と歩む ルワンダに生きる日本人義肢装具士」を担ぎながらの全国行脚。もちろん売るため。だから体力が必要なので、日々仕事のあとにトレーニングを実行中なのだ。



【ケニアにいた頃の話。】

私がアフリカに関わるようになって30年が経った。自分の人生の半分以上だ。ちょっとびっくり。今日は初めてアフリカに行った時のことを思い出してみた。

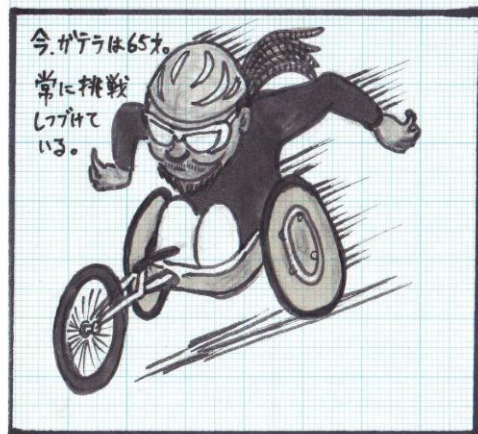
専門学校を出て仕事に就いた。そこは特許を扱う法律事務所。外国との取引が主で、英語が生きかせると思ったからだ。でも実際に入ってみると、自分の英語能力を使うわけではなく、弁理士が書いた英文をそのままタイプライターで打っただけだったり、英文で書かれた時期を通知するリマインダーの空白部分に、書類提出の期限を打ち込むだけの作業ばかりだった。但し日々たくさんの書類が回ってきて、目の前に山積みになったそれらを片っ端からやっつける仕事は、それなりにやり遂げた感も多かった。

しかしお昼時が辛かった。みんなで会議室に集まって、テレビを見ながらお弁当を食べる。おしゃべりは楽しいけど、どこか空しく、逃げ出したくなった。そして見つけた先がケニア。そこで日本人が運営していたスワヒリ語の学

校に入り、約半年勉強した。

寺子屋のような学校で、勉強というよりは、アフリカを知るための学校で、楽しかった。私が入る前は強者と呼ばべき灰汁と癖のある先輩も多く、アフリカを離れてもなおそのまま癖を出し続けたり、アフリカにいてもなお灰汁だらけだったりする人が多く、良い時代だったと思う。

学校を終え、ケニア在住の獣医さんのところに居候をした。お金もまだある。ビザもまだある。日本に帰りたくないという理由で、ズルズル帰国を伸ばした。その獣医さんも癖のある人で、すんなりと居候を受け入れてくれた割には、私の存在を無視するが如く、な～んにもしてくれない。今となっては理解するのだけど、その頃は何かしてくれること（どこかに連れて行ってくれたりとか）を期待していたのです。が、そこで期待されたのはご飯作り。つまり飯炊きということです。幸いその時期に居候をしていた男性がいて、マメに料理を作ってくれるので、大変ありがたかったです。何しろ日本のようにひねれば火がつくガス台があるわけではなく、灯油コンロ。これは2種類あり、単に



灯油に火を灯して使う物。これは火をつけるのが楽だけど、火力が弱く、調理をする時イラつくことも多い。もう一つは灯油バーナーと呼ぶのですか？灯油に圧をかけ、気化させて使うので、火力が強い。そして私はこの圧をかけるのが苦手で、いつも灯油がぴゅーっと出てしまい、散々な目に遭った。

ある日めずらしくうまく火をつけることができ、ご飯を炊いていた。しかしおいしく出来上がるはずの白飯を焦がしてしまった。そしてそれをなじる獣医…。

またある日、獣医は私にズボンの丈直しを依頼してきた。仕事を頼まれて嬉しかった私だが、誤って関係ないところにも切り込みを入れてしまった…。そしてそれを未だになじる獣医…。

もう少しお手柔らかに言ってくれてもいいだろうと、そこで居候をしたことを後悔し始めた頃、私の人生を変える経験をした。

先に書いたように、その頃のケニアには強者の日本人が多かった。大義名分をいちいち言うこともなく、気がつけばアフリカ、だけどアフリカ。いつの間にか関わってしまったという人が多かった。そんな人たちが、その獣医さんの家に集まっていた。そこに私もいたのだが、存在しなかった。つまり他の人たちはみんなそれぞれ自分がやっていることを喧々囂々話している。俺はナイロビでコンピューターを扱う会社で働いているとか、孤児院の運営がままならないとか…。

私はその会話の中に全く入れなかった。入りたいのに入れなかった。話せることがなかったのだ。日本でただ働いていた私には、熱中できることも見つからず、自分でトピックとなり得る話を提供することができなかったのだ。

みんな話を聞きながら、どんどん落ち込む。みんなはこんなに生き生きとしているのに、私には何も無い。自分ががっかりしたと同時に、そこにいる人たちを羨み、今度この面子で会う機会があったら、絶対自分も会話に加われるようになってやろうと思った。

それから時間が過ぎ、あの面子で会う機会は訪れていないが、あの時より少しは中に入ることができるようになっただろうと思いたい。悔しさが動力となることは、この時に限ったわけではなく、義足作りの修行をしていた時も同じような思いを味わった。だから悔しい思いをするのは決して悪くないなぁと思うのである。

そこで居候をしている間、東アフリカを少し旅行した。武勇伝を残せるような旅行はしていないが、それなりにアフリカを感じたつもりだ。その頃は所持金も多くなかったのも、安宿に泊まったり、安めし屋で食べながら、こっちの人を観察した。自分と何が違って、何が同じかなどを。

私がケニアに着いた頃は、人間よりも動物に関心があった。サバンナの動物を見るために、何度もサファリに行った。だけどそのうちに飽きた。人の方が面白く感じたのだ。もしかしたらアフリカの人たちの存在が、身近になってきたからなのかもしれない。どうしようもないことで大騒ぎする彼らをもっと知りたくなった。そしてこれは余談だが、

そのどうしようもないことで大騒ぎする人たちに会いすぎて、今はまた動物に癒しを求めている私がいる。

あの頃、間違いなく私はアフリカに恋をしていた。日本のしがらみから抜け出して、自由になり、体も心もすっきりしていた。

そんな時にガテラに出会った。会った時のインパクトはものすごかった。見てくれもそうなのだが、むしろ内面から来る「俺はこうだ」という信念みたいなのが、ビシバシ伝わってきて、圧倒されるものがあった。このケニア滞在中にガテラと会話したことは数度しかない。でもその頃の日記帳を読み返すと、そこかしこにガテラのことが書かれており、未だに彼ほど私に印象を残したアフリカの人間に会っていない。

滞在中にトラックツアーに参加した。荷台を改造したトラックでアフリカを回るというツアー。長いものだとアフリカを何カ月もかけて縦断するようなものもある。私が行ったのは、途中テントを張りながらビクトリア湖を1か月かけて一周するツアー。いろんな国の人が集まっていた。その中で個人で申し込んだのは、私ともう一人ドイツからの女性。テントは昔ながらの三角テントで、私はその女性と、お互いつたない英語で話しながら一緒に過ごした。

このトラックツアー、参加する前は冒険に満ちていて、こりゃ面白そうだと思ったものの、結局は移動・寝床探し・ご飯作り、時々イベントという状態。一日のほとんどは移動と食事作り。この時私は生まれて初めてアボカドを食べ、世の中にこんなにまずい果物があるのかと思ったのでした。

移動はトラックなので、私たちは乗っていればいい。スタッフに料理人もいたから、基本はその人が作っていたが、みんな暇なので適当に手伝う。そして喰らう。

たま〜に野生の動物を見るために国立公園に立ち寄る。そして私の初ルワンダはこの時だった。ルワンダ大虐殺が起こる前のルワンダ。英語圏のケニアから、フランス語圏のルワンダに行き、なんだか気取ったような雰囲気があり、どうにも馴染めなかった。



多分どれが私かわからないだろうけど、右端です。獣医さんのところに居候した仲間たちと、マサイマラ国立公園方面へ。既に太っています。

テント生活でろくにシャワーを浴びる機会もないので、何度かあまり高級でないロッジに泊まり、そこでみんな一気にシャワーを浴びたり、洗濯をした。何日もホコリだらけになって移動し、シャワーを浴びて一皮むけるという感覚を味わうことができた。

しかしこの生活がまずかった。体を動かさないのに食べる。当然結果はわかりますね。アフリカで食べたもの、すべておいしかった。まずかったのはあのアボカドくらいだ。身も心も解放されていた私は、あれもこれもと食べまくっていた。

アフリカ滞在を終え、実家に夜到着し、隣の叔父叔母の家の前を通り、父のいる我が家に向かう時、台所で料理をしていた叔母が怪訝そうな目でこっちを見た。あまりに丸い顔になっていたの、誰かと思ったそう。

そういえば日本を出る時に荷物に詰めたジーンズ、なんだか最近履きづらいなとは思っていたが、体重計に乗ってびっくり。たった1年のうちに10キロ太っていた。

アフリカには魔力がある。特に女性を太らせる魔力があるようだ。アフリカを訪れる男性の多くは、意外と保守的で、食を受け付けず、お腹を壊したり、痩せたりする。が、女性は強いね。何でも食べるから、太って帰る。

あの時のアフリカ、私にとってはとても良い思い出。スワヒリ語の学校に通った時は、私が同期の中では年長だった。その年齢が上（つまり年寄り）ということ、何度も何度もしつこく同期から言われ、嫌な思いもした。今でいうハラスメントみたいな感じだった。そしてそればかり言う同期を軽蔑もした。アフリカにまで来て、くだらんことを言いやがる、と。

日本には長いことお付き合いをしていた男性を残し、ケニアに行き、そこから毎日のように手紙を書いた。この景色と一緒に見たい、この面白さを分かち合いたいと。だけど結果的にはケニアかぶれになった私は、日本に戻ってからあっさりフラれた。

嫌な思い出もあるものの、あの時獣医さんの家に集まった日本人に、私が勝手に悔しさを感じ、感じたからこそ、それが動力となって今につながっているというのは、悪くないなあと思う。だからあの時優しくなかった獣医さんに感謝している。

アフリカに関わり30年。アフリカに恋をした私が、今



ルワンダ事務所代表ガテラより

【挑戦】

来年4月に行われる長野車いすマラソンに出るため、目下トレーニング中だ。

パラリンピック出場を目指していたが、参加資格を得るのは難しそう。記録云々もさることながら、ルワンダパラリンピック委員会内部の諸々の事情で、その権利を手にするのは厳しい。

だが俺たちは日本からたくさんの支援を受けた。だから俺はその人たちの前で走りたい。ここまで来たぞと言うのを、みんなに見てほしい、そして声援を送ってほしい。

長野車いすマラソンはハーフの20キロ。果たしてどこまで自分が走れるか。俺にとっては挑戦だ。年齢だって決して若くない。日マルワンダで練習をしているが、一般道を走ることができないので、月2回の歩行者天国になる時と、最終土曜の一斉奉仕の日が、一般道での練習となる。それ以外はジムで筋トレをするのが主だ。

ここには車いす競技を教える人間もいない。だから練習も果たしてこれで正しいのかどうか分からない。自己流である。だから完走できるのか、それすらも分からない。

だが、俺はやる。

は日本を恋焦がれているというのも事実で、しかしこれからもルワンダで義足を作ろうとも思っていて、私の終の棲家はどこになるのだろうか？と、老後を考える時間も増えてきてしまった。まあ、なるようにしかならない。

【整理整頓ができない。】

どうにもなかなかうちの義肢装具士ができないことの一つに、整理整頓や掃除がある。20年かけても、習慣として身につかない。それに気が付くと、とりあえず注意をする。片付けましょう、手入れをしましょう、きれいにしましょうと。

言われたときはする。そしてその後数日間はそのままだ。けど続かない…。同じ注意を何度もするのは、する側が結構しんどい。される側は、あ、そうでしたねとにっこり笑って、今度から気をつけますと言えば、それでいいのだ。しかしする側は、忘れられるとその都度自分を責める。私の言い方が悪かったのだろうか？押し付けているのではないか？そして、ああ、また言わなくちゃいけない。何度も同じことを言って、嫌われるだろうなと、そんなことまで考える。だからしんどい。

義肢装具士の皆さん、日々義足を作る腕は上がってきているのですよ。いろんな症例に出会い、その都度工夫をして、応用力もついてきたと思う。けどどうしても、この整理整頓が苦手なようだし、それは自分たちの仕事ではないと思っている節があるようです。問題はそこなのだ。自分たちの仕事は義足を作ること、それをやれば十分だと思っており、片付けや掃除はそれ専門の人がやるのが当たり前と思い込んでいる。

確かに掃除をする人は雇っている。それは義肢製作所に

無謀であったとしても、やってみよう。なぜならばやらない限り、それが無謀かどうかはわからないからだ。あとになってからそれを判断したとしても、誰が迷惑するわけではない。

俺の人生、あと何年残っているのかわからない。俺の爺さんは長生きしたから、俺も長生きできるかもしれない。だけど当然それと逆のこともあり得る。

やらないで死んでいくより、やって死んだ方が、多分死に甲斐があると思う。人はいつか死ぬのだ。

若い頃はすぐに筋肉がついたが、年齢と共にそれに時間がかかるようになっていく。それはやむを得ないことだ。それと向き合いつつ、トレーニングで流す汗は気持ちいい。

マミから話を聞く限り、日本の若者は消極的であるらしい。人目を気にして、実行を躊躇することも多いらしい。そんな若い人たちが、大人になって後悔するよりは、今やって、失敗して笑われた方が、いいではないか。周りに自分の味方を増やし、サポートされ、失敗したらそこでまたサポートしてもらえばいい。

だからためらわずに、動いてください。そして大人になって、その若かりし頃の失敗をネタにできるよう、今を生きてください。だって人と話すにあたって、ネタが多い方が人気者になれるだろ？だから俺のこと、応援してくれよな。

は足に障害のあるスタッフもいるので、掃除が大変だという理由だ。しかしその存在のために、俺たちは掃除をしなくても良いという考えに至ってしまうのです。



片付けないので、壁に工具の形をかたどり、そこに戻すようにさせている。にもかかわらず、戻してくれない彼ら…。

そういうことを考えると、日本の学校に生徒が掃除をする時間があるというのは、非常に良いことだと思うのです。当然サボる生徒もいるだろうが、とりあえず掃除は自分たちがやるという意識を持たせることができる。自分が使ったものは自分でしまう。自分が汚したところは自分で掃除をする。その意識がルワンダの人にもほしいなあと思う。

果たして日本の教育界で、学校での掃除というのはどういう立ち位置にあるのだろうか？タケン君はお勉強をしていればいいのよ。良い大学に入って、良い会社に入って、それがママの願いなのよ、などというお母さんにとっては、掃除の時間など無駄だと思っているのだろうか？

でもここにいるとつくづく思う。掃除をする意味を精神的に理解させるような教育は大切なあつて。

お勉強ができることがすべてではない。頭でっかちで、その重さを支えられないような人間より、バランスよく心も育てたいと思うのでありました。



今号の患者さん

私の名前はアンジェリカ、9歳の女の子です。キガリからバスで2時間走ったルリンドというところに、お父さんとお母さん、そして5歳の弟と住んでいます。お父さんは畑でいろいろな物を作っています。例えば豆・ジャガイモ・サツマイモなど。お母さんは、私と同じくらいの年齢の時、ポリオという病気にかかり、左の足が不自由です。だから杖を突いて歩いていて、なかなかお父さんの畑仕事を手伝うことができません。

私は生まれつき右の足が短いので、お母さんと同じように杖を突いて歩いています。お母さんは時々、お母さんが障害を持っているから、私も障害を持って生まれてしまったのではないかと、悲しそうな顔をします。でもお父さんがお医者さんに話を聞くと、ポリオという病気はうつる病気ではないので、お母さんのせいで私の足が短いわけではないということを知りました。

小学校では杖をついているので、みんなと一緒に走り回ることができません。ルワンダの子はサッカーが大好きなので、私もみんなと一緒にサッカーボールを蹴っ飛ばしてみたいなあと思っていました。

ある日、お母さんと一緒にキガリの町に行きました。そして足を作っている所に連れていかれました。石膏のついた包帯で足をぐるぐる巻きにされ、それがだんだん固まってきた、これからどうなるんだろうと、ちょっと不安になりました。

作業をしてくれたおじさんは「大丈夫。怖がらないで。すぐにみんなと一緒に遊べるようになるよ。」と言ってくれました。

それから1週間後、私とお母さんはまたそこに行きました。そうしたら鉄の棒で作られた、なんだか変な靴みたいなものを履かせられました。おじさんが「さあ、立ってごらん。」と言ったので、私は不思議な気持ちで立ち上がりました。

あれ？今まで杖がないと、長い方の片足だけで立たなくちゃいけなかったのに、両方の足で立てるようになった。何だろう、これ？

お母さんはにっこりして、私を見ていました。私は面白くなって、歩いてみました。歩ける！杖がなくても歩ける！もしかしたら走れるかも。ちょっと冒険してみました。うわ～、できた！これならみんなと一緒にサッカーができるかも。そしてもっともっと走ろうとしたら、転んでしまいました。痛かった。だけど痛いことより、嬉しさの方が一杯でした。

すごいな～。こんなものが作れるなんて。これ一つで、



子供の成長は、お母さんも楽しみ。何度も転んで、大きくなってください。

できることがたくさん増えるなんて。

アンジェリカという女の子。とてもかわいい子でした。最初は恥ずかしそうに、私の質問に答えていました。もごもご話しているの、お母さんが横から「しっかり話さない」と注意していました。最初の日、女の子も何をされるのかわからなかったもので、怖かったようです。

でも次に来た時、装具を履いて、杖を使わずに歩けることがわかり、微笑みがもれました。私がとてもうれしくなる瞬間です。

はにかみ屋だと思っていた彼女は、実は活発な子で、いつも男のことで遊んでいるとのこと。きっと今ごろは男の子たちに交じってサッカーボールを蹴っていることでしょう。

私たちがやっていることは、子供の未来にも関わっているということを改めて知り、手を抜けないと思った次第です。

【自然に囲まれ。】

ワンラブランドは広いです。初めて訪れた大抵の人は、その広さに驚きます。未だに私も、こんな広いところで生

活をしていることに驚きます。

もともとここは未開拓。政府からもらった時には、近所の人々が勝手にお芋やバナナ、豆などを作っていました。だから私たちが工事を始めた時には、その人たちの農作物を勝手に掘り起こしたと、裁判沙汰にもなりました。

資金がないので、レンガ造りをし、その隣隣のコンゴ(当時のザイル)に逃げていたルワンダ難民を大量に雇い、コツコツと建物を作ってきました。ガテラは現場監督、私は義足作りというふうに、役割分担をしながらの日々でした。

2000年には何とか住める状態になり、町中からここに引っ越してきて、実際に大変だったのはそれからだったかもしれません。今まではそれでも家と仕事場が違っていたので、頭の切り替えができたけど、今度はまったく一緒。だから四六時中誰かがドアの前で待ち受けているという状態でした。これは精神的にきつい。常に誰かが来るかもしれないと、それなりに身支度を整えておかななくてはいいない。私はド近眼なので、普段はコンタクトレンズ、家に戻ると牛乳瓶の底メガネをかけるのだけど、メガネ顔で人に会いたくないから、長時間コンタクトを付け、故に目が乾燥し…という状態。そのうち段々人に会うのが面倒になってきました。

土地をもらってから10年くらい経ってやっと、今の形に近くなりました。建築そのものに費用をかける必要はなくなったけど、広い分人件費・修理費がかかるようになりました。これはどうしようもありません。人件費をケチれば、庭は荒れ放題になるし、第一セキュリティを雇わないと、泥棒に狙われるという危険が伴います。



たまに現れるカメレオンちゃん。
しばし私の心を癒してくれた。

そんなこんなで、いつまで経っても金食い虫のワンラブランドではありますが、高く育った木を眺めていると、自然と緊張がほぐれ、大きく深呼吸をしたくなります。そしてここにいられて良かったと思うのです。キガリ市内で、こんなにたくさんの木が生い茂っているところはありません。しかもそれは自分たちで1本1本植えた木なのです。やったぜ!と思ったとしても、誰も文句は言えません。その木には、恋の季節になると水鳥やハタオリドリが巣を作りやってきます。その様子を眺めるのが、私の楽しみとなっています。

そしてここにたくさんの自然があります。いつの間にか、ヘチマがなっていたり(今はシャワーの時、それで体を洗っている)、バナナ・グアバなど、これもいつの間にか自家製の物を楽しめるようになりました。まだ試していないのは、勝手に生えてきて実り始めたコーヒー。赤く熟した実を取って、ワンラブ自家製コーヒーを夢じゃない。

そして動物や虫たち。何でもいます。カンムリ鶴、たまに舞い降りてきて、甲高い声を上げます。蛇、カメレオン、ナナフシ、蟻塚を作る蟻。木には鳥が集まり、朝になるとあちこちでピークパーチク鳴いています。頭の大きな鳥は木に大きな巣を作り、子育て中です。そして蜂。置かれた巣箱でせっせとハチミツを作っており、それをちょっと失敬と奪うのは私たち。

広すぎて大変なこともあるけど、癒されることも多いワンラブランド。私にとって憩いの場所であると共に、戦い



立派に育ってくれた木なのだけど、木も年を取って折れちゃったりします。
この日は、私のオフィスのすぐ横に折れてきました…。

の場所でもあって、なかなか思い入れは深いのでありました。

【「義足と歩む」その後。】

前号で「義足と歩む ルワンダに生きる日本人義肢装具士」(汐文社)のお知らせをしました。お読みになってくださった方もいらっしゃるかと思います。

おかげさまでなかなか好評です。児童書というカテゴリーでありながら、しっかりした内容なので、大人も手に取ってくれます。

この本の発売に当たり、もちろん自分たちでもいろいろな人に声をかけ、宣伝をしました。だけど嬉しかったのは、自分が全く知らないところで、書評家が古くからある雑誌に書評を載せてくれたことです。数ある本の中から、これを読んでくれ、書評のプロが感想を書いてくれた。これはうれしいです。認められた!と思い、ルワンダで私、ガッツポーズをとってしまいました。

来年の帰国の際には、この本を担いで歩き回ります。行く先々で宣伝し、一人でも多くの人に読んでもらいたいと思っています。この本を読めば、私がくどくどワンラブの話をしなくても、歩みや喜び、そして葛藤を知っていただくことができるでしょう。

そしてさらに個人的な野望が続いていきます。それは本の最後にも書いてありますが、私の大好きなサザンオールスターズの桑田さんにルワンダに来てもらうということです。国民的ミュージシャンである桑田さんですが、同じ茅ヶ崎出身。勝手に親しみを感じ、私が死ぬまでにぜひルワンダにお招きしたい、そんな野望を持っています。

本を書いてくれたのは茅ヶ崎出身のライター、本の主人公も茅ヶ崎、ここまででダブル茅ヶ崎と思っていましたが、さらに茅ヶ崎生まれの桑田さんを加えて、トリプル茅ヶ崎を狙っている私です。

やってやれないことはない。ガテラも無謀な挑戦をしているので、私も負けずに無謀な挑戦を続けます。



雑文もろもろ

最近あまりにも義足作りが日常になってしまったので、なかなか自分の中で、これは！と思えるトピックがなくなってきてしまった。慣れるというのは、良くもあるが、悪くもある。もっとアンテナを張らなくちゃいけないと戒めつつ、今日も過ごす。

ガテラのコラムにもありますが、来年4月に行われる長野車いすマラソンの出場を目指しています。本人は毎日トレーニングをしているけど、何しろ競技に参加するのが初めて。どんなふうに進められるのか、うまく想像ができません。また一般道を走るということが、どういう状況なのかというのも、体感するのが難しいです。

だから完走できるか、それすらわかりません。もしかしたら途中で棄権ということもあるかもしれません。

でもどうぞ皆さま、ガテラと一緒に応援してください。65歳の挑戦です。

長野という場所を選んだのは理由があります。長野の小学校が15年に渡り、私たちを支援してくれています。学校を訪れると、いつも大歓迎をしてくれます。ガテラ、その子供たちの前でいいかっこをしたいのです。ガテラさんって応援してほしいのです。そして俺もがんばってるから、お前たちもがんばればよ～って伝えたいのです。

交流が始まった最初の頃に出会った子供たちは、もう立派な大人になっているはず。彼らが大人になる分、私たちは年を取っていく。それが自然な姿です。でもガテラ、まだちょっぴりいいところを見せたいようです。

皆さんが応援してくれれば百人力。怖いものなしです。その日は声を枯らすくらい、私も応援したいと思います。そしてそういうことを体験させてもらって、とてもありがたいなと思います。いつも思うことだけど、私たちは回りの人に恵まれたなあって。陰で支えてくれるボランティアの人たち、軌道を外しそうになると、そっとたしなめてくれる人たち。その誰が欠けても、ダメなんだな。大金持ちにはなれないだろうけど、幸せ者であることは確か。

皆さんがいたから、私たちがいられる。そしてその逆も思ってもらえたらうれしいなあと思うのであります。

雨降りの今日、ちょっと感傷的な私。

【ご寄付をありがとうございました。】

ワンラブ通信66号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（8～11月）

8月	52,400円
9月	1,015,000円
10月	446,550円
11月	円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	23本
装具	4本
杖	38本
車いす	4台

【帰国のお知らせとお願い。】

来年3・4・5月に帰国します。久しぶりに日本で桜を見ることができそうです。桜は私にとって、ちょっと胸の痛くなる花。父が亡くなる前に家族で桜を見に行ったことを思い出すからです。

さて今回は帰国中は、いろいろな場所でワンラブの活動の話をしながら、皆さまのご協力をお願いしたいと思っています。

この帰国中に、ワンラブの話を聞いてみたいという人がいらっしやいましたら、ぜひ何か企画をしてください。そして私たちのことを呼んでください。時間の都合がつかない限り、伺わせていただきます。小学校、中学校、高校、そして大学。また企業や団体、サークルなどなど、余程怪しい集まりでなければ、すっ飛んで伺います。

ルワンダの写真を見せながら、ガテラと私で話します。場所によっては、ルワンダの民芸品や、アフリカならではの派手な布を使った小物、そして今回はルワンダで最近はやりのオーガニック商品も持ち帰り、販売をしたいと思っています。それから忘れてはいけないのは、この間発行した「義足と歩む」の本。本当はサララッとサインでもしてお渡ししたいのですが、サインをすると転売する時値段が下がるというので、サインなしで。

あるいは例えばルワンダお料理会。ルワンダのお料理、スパイシーなものはありません。だからすんなり受け入れられる味です。みんなでワイワイ言いながら、ルワンダのお料理を作ってみませんか？私、レシピを増やすべく、ルワンダで修業してきますから。

本来ならば自分たちで企画を立てて…と思うのですが、地元以外のところは場所を見つけるにも、アクセスのしやすさやなど、適当なところがわからず、皆さまのお力で活動の報告をする機会を作っていただければと思います。

ルワンダは最近ビジネスでも非常に注目されており、日本からの訪問者も増えてきています。昔よりは訪れやすい国になりました。だけどまだルワンダって危ないんでしょ？と思っている皆さま、まずは私たちの話を聞いて、今のルワンダを知ってください。そしてそれをきっかけに、多くの方がルワンダに遊びに来てくれればいいな～なんて思っています。

どうぞ私たちが話をする機会を作ってください。よろしくお願いいたします。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、ボランティアも常時募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、未使用切手は下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 Tel: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信67号 2019年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project